

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究（第三期）—紛争と共存のダイナミクス

2017年度第3回研究会（通算第3回目）

日時：2017年12月17日（日）13:30-18:30

場所：AA研マルチメディア会議室(304)

内容

研究会では3編の報告が行われた。各報告の要旨は下記の通りである。報告の後には質疑応答が行われ、それぞれ活発な議論が交わされた。報告1については、インドネシアのイスラームと政治をめぐる状況に関する現状認識や、発見法的なモデルとしての有効性などをめぐって議論が交わされた。報告2については、タイ南部とマレーシアに跨る地域におけるムスリム社会の文化の持続性と、それがイスラームをめぐる政治に及ぼす影響などをめぐって質疑があった。報告3についてはタイとマレーシアのそれぞれの政治状況とイスラームについて議論が行われた。

報告1

「イスラーム過激派と穏健派の政治的駆け引きについて：インドネシアの事例をともに考える」河野毅（東洋英和女学院）

まず試論として3次元座標で提案したのは、インドネシア政治を分析するための3つの軸である。(1) x軸はイスラーム色の強弱を示し(原点に行くほどイスラーム色が強い)、(2) y軸は中央集権制の強弱を示し(原点に行くほど中央集権制が強い)、(3) z軸は貧富の差の強弱を示す(原点に行くほど貧富の差が大きい)。この3つの軸はインドネシア独立時からインドネシアを揺るがした政治勢力を表現している(x=イスラーム政治、y=地方の反乱、z=共産勢力との権力闘争)。この3つの軸を数値化することができれば、時系列でインドネシア政治の変遷を「箱」(長方体)の体積が拡大し縮小することで示すことが可能となる(最大体積、つまりイスラーム色が弱く、地方に分権され、貧富の差が少ない、がインドネシア民主政治の最大のポテンシャルであると仮定するので、この座標軸にはリベラル・バイアスがある)。

今般の発表では、x軸の強弱を利用して、最近の過激派と穏健派の駆け引きを分析した。まず、過激派の意味であるが、行動と思想それぞれが過激であるグループであるとした。例として、行動が過激な Front Pembela Islam (FPI)、またテロリスト集団である Jamaah

Anshorut Daulah Khilafah Nusantara (JAD)、Jamaah Islamiyah (JI)があり、思想が過激である Hizbut Tahrir Indonesia (HTI)がある。しかし、HTI から JAD を支え、シリアに渡りイスラム国に参加した Bahrin Naim の例にみられるように、思想と行動を明確に分けることは難しい。ここ 2 年ほどのインドネシア政治では、相次ぐイスラム過激派によるテロ事件は継続して起こっており、同時にジャカルタ州知事選を前後に FPI や Forum Umat Islam (FUI) のメンバーによる市民に対する脅迫事件が頻発している（同組織の幹部に対する侮辱をしたという理由で市民を脅迫、強制的に謝罪させる）。これに対する当局による取り締まりは後手になりがちである（例：2017 年 6 月にジャカルタ・チピナンで起こった FPI による少年脅迫事件）。一方、穏健派の Nahdlatul Ulama と Muhammadiyah 青年組織（Banser, GP Ansor, Pemuda Muhammadiyah）による似たような市民に対する脅迫事件も起こっており、両組織のリーダーが自らの青年メンバーをコントロールできない状況が続いている。

X 軸は原点に向かうベクトルが強いように見受けられるが、これは過激派と穏健派による権力闘争の結果である。インドネシアには、市民感情を煽る反植民地主義を利用したイスラム団体による言説（例：鳥インフルエンザはイスラム教徒を抹殺するためにユダヤ資本とアメリカが製造しインドネシアに拡散したという言説）が受け入れられる土壌がある。さらに、政治家もイスラム教徒の感情と団体を利用して自らの権力強化を図る傾向は続いている（例：2016 年 2 月ボゴール市長による HTI 開所式スピーチ、ジャカルタ州知事選時のイスラム教徒動員と扇動）。思想的には、インドネシアの理想国家像をめぐる駆け引き（国是パンチャシーラ対カリフ制）があるが、HTI の違法化により、パンチャシーラが優位になりつつある。この権力闘争の大きな節目が 2019 年 4 月に投票予定の国会選挙と大統領選挙であり、これに向けてさらなる駆け引きが起こり、インドネシア政治の x 軸は左右に振れることとなる。

報告 2

「「仏教国」タイと「イスラーム」マレーシアを分断する歴史意識：コタ・ムンクアンの主は誰か？」
黒田景子（鹿児島大学 AA 研共同研究員）

本発表の目的は、マレー半島の 17 世紀以降の歴史において、タイ語とマレー語の史料の記述比較することにより、1) 欠けている歴史情報を埋めることを試み、2) その欠落により国民国家としてのタイとマレーシアの隣接する地域で住民の歴史認識の興味の差違を指摘することである。さらに 3) このマレー半島中部地域の仏教徒とムスリム共存地域の特性を明らかにする試みでもある。

マレー半島中部は東西南北の中継交易地域として知られているが、クダーやパタニなどの初期にイスラーム化した国は同時にシャム、アユタヤ朝の交易ネットワークに朝貢国として位置づけられてきた。しかし、1767 年にアユタヤ朝がビルマの攻撃により崩壊すると、まず、タイ語の歴史史料が失われ、特にマレー半島部の地方に関する記録は非常に限られ

たものしか発見されていない。

タイ語史料とマレー語史料の比較と発掘が行われてこなかった結果として、この地域の歴史については主に英国東インド会社の植民地文書を中心として欠落部分が埋めるしかなく、研究は交易と領主の事績に偏っている。

しかしながらクダー・マレー農民の中には先祖や村の始祖についての情報や家譜を所有し、2000年以降ムスリム墓地の墓碑の再解釈や家譜、言い伝えなどから、19世紀前半のシャムのクダー侵攻と占領期(Perang Musuh Bisik)について人々の歴史としての記憶が掘り起こされるようになった。またその記憶はネットの発達により子孫達の運営するブログなどでマレー語で公開されている。

ここにクダーのコタ・ムンクアン村についての記録が発表され、その地には8世紀の後半にリゴール(ナコンシータマラートのこと)からSYARIF ABU BAKAR SHAHとその后が40頭の象と家臣をつれて移住し、コタ(城)を作ったが1821年のシャム(ナコンシータマラート軍を指す)の侵攻によって滅ぼされ、王族の遺骸や墓がコタムンクアンの他、ナコンシータマラートから同行した家臣が住み着いたというTualangなどに葬られているという。

この「史実」からクダーの歴史好きの人々によれば、SYARIF ABU BAKAR SHAHはアユタヤ最後の王で、アユタヤの王はムスリムであったという解釈までされている。

この解釈の背景には、クダーがシャム・ラタナコーシン朝に「植民地化」され、パタニがなおも反タイ(シャム)抵抗運動をしているという現状が影響している。しかしタイ側の史料と比較すると別の興味深い解釈が可能である。

すなわち、コタムンクアン村で著者が行ったフィールドワークによれば、1)この村にコタをつくった人々は確かにリゴールとの縁があり、戦いののちリゴールに捕虜となって連行され、逃亡して帰村して村を再建したという言い伝えがある。2)隣村のkg. BahruにはMekMulungというこの村にしか伝わっていない伝統芸能があり、その舞踏と儀式はクダーに原理主義的イスラーム実践(Dakwah)が流行し、非ムスリム的な芸能や儀式が一次公式には姿を消した1990年代にも継承されていた。その踊りの複数のストーリーは故郷を追われたリゴールの姫の物語やリゴールの夫婦がまじないによって子供を得る、などリゴールと深い関係がある。さらに、儀式においては、呪いの様式にバラモン教的な要素が見られる。

これらの調査と史料の比較により、著者はこのコタムンクアンに来たSYARIF ABU BAKAR SHAHとのその一族はリゴール方面からアユタヤ崩壊時に逃亡してきた領主の一族ではないかと考えている。

タイ語の史料ではアユタヤが崩壊した時に、ナコンシータマラート(リゴール)を預かっていたのは領主ではなくPra Palat(副国主)のNuuであり、タイ語の家譜によれば、彼はアユタヤ出身者で妻がナコンシータマラートの貴族である。Nuuはアユタヤ崩壊後速やかにナコンシータマラート中心の交易圏を確保し、そののちタークシン王に捕らえられるも8年後にナコンシータマラート領主に復帰するが、元のアユタヤ時代の正式なナコンシータマラート領主については、アユタヤの都に罪を問われて呼び出しをうけてナコンシータマ

ラートをでたまま、行方不明になったとするのが複数のタイ語の年代記の記述である。

アユタヤ朝以下のシャムにおいては地方領主は仏教を尊重することが命ぜられてはいるものの、実態としてアユタヤ朝においてはペルシャ商人が高位を得て仏教徒に改宗したブンナーク家の例や、ソクラーにはジャワから逃れてきたという Dato Mogol とその息子の Sultan Suleiman などのムスリム領主がいたことが分かっている。なお、スレイマンの一族はパタルン領主として 18 世紀の半ばに Tata が仏教徒に改宗している。

南タイといえば、マレーアイデンティとムスリムとしての価値観が強いパタニ王国の例が現在のテロとともに思い起こされるが、それ以外の南タイ諸州にもムスリム村落と仏教徒村落が共存している。またムスリムから仏教徒に改宗するという記録は、20 世紀の半ばのクダーの例や現在のサトゥーンの例など「緩い」イスラームの実態がある。

さらにコタムクアン村やトゥアラン村においては、現在はマレー語クダー方言を話しているが、これらの地域は Samsam と呼ばれるタイ語南タイ方言を日常語とするムスリム集団の村、あるいは 200 年以前まえからの移住者である仏教徒シャム人 (Malaysian Siamese) に隣接しており、50 年から 100 年前にはクダーの人々の多くがタイ語を理解していたという報告がある。クダー州の地名にはタイ語由来のものが多い。以上の状況からも SYARIF ABU BAKAR SHAH の一族も Thai-speaker のムスリムであった可能性が高い。

現在の研究環境の問題点としては、国民国家としてのタイとマレーシアの双方にはそれぞれ強固な仏教国価値観、イスラーム価値観が国民教育などで普及していることによって、タイでは仏教徒価値観が国民的価値観となり、マレーシアではムスリムが仏教徒に改宗するというような事例を公的には否定せざるを得ない。その結果として経済的な理由以外での興味を互いにもたない状況が続いているのも、この地域の歴史研究に欠けているものである。

報告 3

“Islam and Religious Pluralism in Contemporary Thailand and Malaysia”

Omar Farouk (広島市立大学、AA 研共同研究員)

In the recent years there is a lot of curiosity on how Islam manages Religious Pluralism. Adopting a Western approach to try to understand this phenomenon may not be helpful. The anthropological world of Islam in 7th Century Arabian Peninsula cannot be the same as 21st Century Southeast Asia although the texts of Islam may remain unchanged. Similarly, the situation of Religious Pluralism in Muslim-majority countries may not be the same as Non-Muslim majority countries. This paper is an attempt to review the theme of Islam and Religious Pluralism in the contemporary period in Thailand where the Muslims constitute a minority population and in Malaysia, where they are the majority. The theological perspective of Islam which considers Pluralism a natural

condition is introduced and its anthropological background is described. There is little evidence of any physical violence between the Muslims and the others both in Thailand and in Malaysia. Although Thailand continues to countenance a Malay-Muslim separatist insurgency which may have some religious rationale it is not a religious uprising. In Malaysia, although there are underlying inter-faith tensions, it is intra-faith schisms within Islam that threaten to upset the country's religious harmony.

(以上、終わり)